

ものと知のクロスロード： 東西知識交流における長崎・出島

長崎歴史文化博物館 主任研究員
平岡隆二

はじめに

17-19世紀にわたる日本とオランダとの交流は実に多分野・多領域にわたるものであったが、中でも VOC の日本における拠点であった長崎・出島を中心に繰り広げられた学問上の交流については、多くの人々が関心を寄せている。それぞれ異なる背景を持つ互いの学術知識や文化を理解することは、言語や資料上の制約もあってときに困難をきわめた。医学、植物学（本草）、語学、天文学、軍事などの分野を中心に洋の東西で進められた数多くの研究は、ときに両国の政治的な思惑を色濃く反映しつつも、互いの存在に対する知的探究心の強さを確かに物語っている。以下本稿では、最新の研究成果を利用しつつ、近世期の東西知識交流史の点描を試みたい。

蘭学前夜

日蘭の知識交流にまつわる先行研究や過去の展示会は、その多くが 18・19 世紀に焦点をあわせたものであるが、17 世紀の段階からすでにさまざまな形での交流が行われていたことは、これまで比較的注目される機会が少なかったと言える。本展で紹介するその事例の 1 つが、写本『蘭方秘訣』（個人蔵）に見られるオランダの大型蒸留器であるが、これは日本と西洋文明との間でおこなわれた史上初の技術移転プロジェクトと言える、寛文年間の製油技術移転にまつわる蒸留器である（図 1）。

出島商館医のカスパー・シャムベルゲル Caspar Schamberger (1623-1706) が慶安 2-3 年 (1649-1650) に幕府の要請で江戸に滞在し、患者の治療に大きな成果をあげて以降、オランダの医術に対する注目と関心は大いに高まった。その結果、VOC に発注する医薬品、医書などの注文も著しく増大したが、輸入医薬品の中でとりわけ大きな比重を占めていたのが製油（薬草などから抽出された薬となる油）であった。製油は非常に高価な上に、供給も不安定であったためか、やがて寛文 7 年 (1667) に幕府は将軍及び老中の名において、

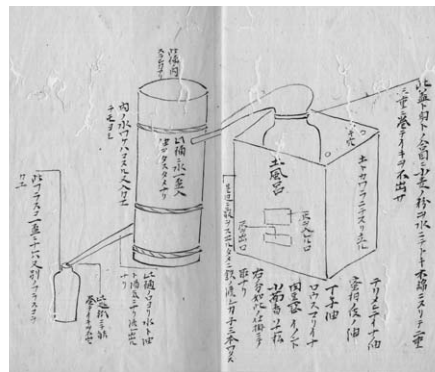


図 1. 写本『蘭方秘訣』に見られるオランダの大型蒸留器

薬草の種や苗、また蒸留器一式及び薬草や蒸留技術に精通する専門家の派遣を VOC に求めた。そして VOC 側は、通商条件の改善を念頭にその要請に応じることにし、寛文 11 年 (1671) オランダから大型蒸留器が取り寄せられ、出島の一角に設置されて、経験豊富な薬剤師フランス・ブラウン Frans Braun による製油の蒸留と、その技法の教授が開始されたのである (Michel and Werger-Klein 2004、ミヒエル 2009 年)。

やがて日本人医師らは、ブラウンの手を借りずにみずから丁子油などを蒸留できるようになるなど、この史上初の日欧技術移転は一応の成功を見た。しかし、輸入植物の栽培は失敗に終わり、オランダ渡りの大型蒸留器もケンペルが出島に滞在した元禄年間には、もはや使用されていなかったようである。いずれにせよ蘭学の開花よりも遙かに早く行われたこの公式の技術移転は画期的な事であり、オランダの医術や医療品を導入することに対する当時の幕府の積極性を物語っている。

この写本『蘭方秘訣』は、寛文 12 年 (1672) に 6 名の阿蘭陀通詞らが蒸留装置についてまとめた報告書が、写本の形で伝わったものである。またその蒸留器を設置するために幕府の経費で出島東端に建設された「油取家」の姿を、阿蘭陀通詞本木家旧蔵の「諸画絵図集」に収録される出島古図で確認することができる（図 2）。この「油取家」は 17 世紀末に取り壊されたため、江戸中期以降の出島図には出てこない。

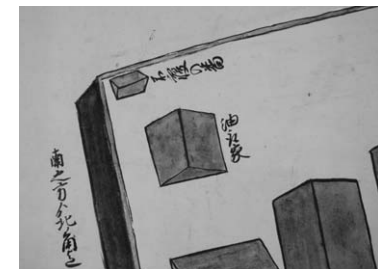


図 2. 出島古図に見る「油取家」
(部分。長崎歴史文化博物館蔵)

他方、17 世紀中に西洋人がおこなった日本研究については E. ケンペル Engelbert Kaempfer (1651-1716) の業績があまりにも有名であるが、ケンペル以前にバタヴィアに滞在していた西洋人たちが、すでに熱心に日本研究に取り組んでいたことも見逃すことができない。その最初期の一例が、1642 年にライデンで刊行されたデ・ボンント Jacob de Bondt / Bontius (1591-1631) 著『インド人の医学 De medicina Indorum』である（個人蔵。図 3）。著者のデ・ボンント（ラテン名ボンティウス）はライデン大学を卒業した後、1627 年から VOC の医師としてバタヴィアで勤務し、ヨーロッパ人として初めて脚気、赤痢などについて詳しく調べた。本書はオランダ領ブラジルの風土病を研究していた W. ピーソ Willem Pies / Piso がライデンで刊行したものだが、熱帯病の描写のほか、東洋医学の針術に関する最初期の記述が含まれている。

私は日本での奇蹟に近い結果について話そう。頭の慢性痛や肝、脾の障害や肋膜炎に対しても、彼らは銀や青銅で作られた針で 7 弦琴の糸より細かい孔をあける。私自身がジャワで見たとくるところでは、針はゆっくり静かに上述のところを反対側に出るまで通すべきである (ミヒエル 2009 年)。





図3. デ・ポント 『インド人の医学』扉絵

また 1682-83 年、および 1685-86 年に出島商館長をつとめたドイツ人のアンドレアス・クライヤー Andreas Cleyer (1634-1697/98) は、医師としてバタビア薬局も経営していた人物で、中国及び日本の植物・医薬品などに関する資料を収集・分析し、その研究成果をヨーロッパの学者に送っていた。プロシア王の図書室長 C. メンツェルは、クライヤーによる日本のクスノキと薩摩地方の樟脳製造装置に関する観察を、ドイツ自然科学者協会の機関誌「博物学論集 Miscellanea Curiosa」に 1692 年に紹介したが、これは日本植物図を紹介する最古の事例である (個人蔵。図 4。ミヒェル 2009 年)。

当時 VOC はすでに数十年にわたって日本産の樟脳を輸出しており、とりわけ薩摩地方から仕入れていたが、その輸出量は薩摩藩が枯渇を防ぐため一時的に採集を禁止しなければならないほどだった。またダンツィヒ (グダンスク) の商人で植物愛好家のヤコブ・ブレイン Jacob Breyn は、1678 年にオランダを旅した際に、庭に植えられていた「日本のクスノキ」を愛でていたし、ケンペルの出島での上官であったファン・アウトホールン Cornelisz van Outhoorn は、バタヴィアの庭に日本のクスノキを植えていた (Michel 2002)。



図4. 日本のクスノキと薩摩地方の樟脳製造装置に関する商館長クライヤーの観察

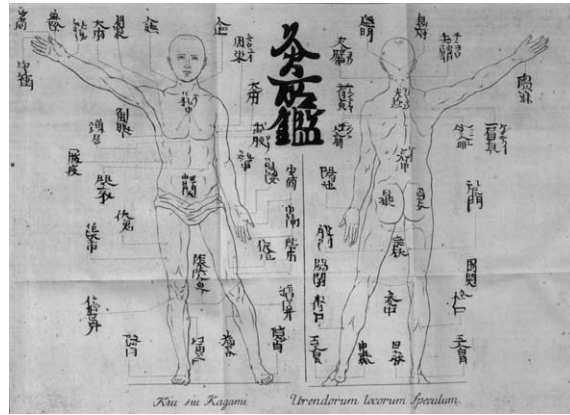


図5 ケンペル『日本誌』所収の「灸所鑑」(長崎歴史文化博物館蔵)

これら VOC による商業活動や、バタヴィアを拠点に日本研究を行っていた学者たちの存在は、ケンペルの『廻国奇観』や『日本誌』における鍼灸術の紹介 (図 5) や、『日本植物誌』におけるクスノキの記述の史的背景を考える上でとりわけ重要である。ケンペルは、スウェーデンからペルシャ・インドを経て、1689 年の秋にバタヴィアに到達する以前は、日本についてほとんど何も情報を持っていなかったが、バタヴィアで上述のクライヤーや、

テン・ライネ Willem ten Rhijne など秀れた日本学者と出会い、翌年来日する頃には、すでに日本で何を調べるべきかについて驚くほど準備が整っていた (Michel 2002)。またペルシャ時代からの友人デ・ヤーヘル Herbert de Jager は、ケンペルのためにバタヴィアの知識人の要望をまとめた覚書を書き、それがケンペルの日本研究の直接の土台となった。彼の日本での研究活動を、優秀な若い助手・今村源右衛門英生 (Genjiro Imamura) の存在を抜きに語ることはできないのと同様に、彼の仕事がバタヴィアの知識人ネットワークに大きな影響を受けたものであったということも強調されねばなるまい。

18 世紀の阿蘭陀通詞

18 世紀半ば以降のいわゆる蘭学勃興期において、長崎の阿蘭陀通詞たちが果たした役割と業績がとりわけ重要なものであったということに異論を挿むものはいないだろう。以下本展でも取り上げる通詞たちの業績について概観を試みたい。

吉雄耕牛 (幸左衛門・幸作など。1724 ~ 1800) は、代々阿蘭陀通詞を勤めた吉雄家の出身で、元文 2 年 (1737) に 14 歳で稽古通詞、寛保 2 年 (1742) に小通詞、寛延元年 (1748) に若干 25 歳で大通詞に進むなど、通詞として当代随一の実力者であった (図 6)。

耕牛は蘭医としても有名で、吉雄流外科を創始し、生涯の門人は 1000 人にも及んだという。彼の療法で特に注目されるものに、出島商館医のスウェーデン人 C.P ツェンベリー (1743-1828) から学んだ梅毒の水銀療法がある。ツェンベリーは著書『ヨーロッパ・アフリカ・アジア旅行記』(1788-1793 年刊) において「この方法は、幸運にも私が初めて彼らに教えたのであった。1775 年と 1776 年にはこの方法を用いて私の指導のもとに、長崎の町内外の大勢の患者を完全に治療した」と述べていた。また同じ『旅行記』は、出島で「KOSAK」が古い銅銭を集めてくれたと記すなど、耕牛との交流についても触れている (高橋 2009 年)。

耕牛が伝授された水銀療法の内容は、写本『紅毛秘事記』などに詳しい。その実態は 1754 年にヨーロッパで公表され、のち 1830 年代から 1930 年代にかけてヨーロッパ各国の薬局方にも収載された「ファン・スウィーテン液 (0.1% の塩化水銀水溶液)」であることが判明しているが、現代の医史学者によっても有効性と安全性の両面においてすぐれた処方と評価されている (高橋 2009 年)。安永年間というかなり初期の段階でこの種の処方が伝授され、また広く実用に供せられたことは、有効性とともにも安全性を重視する現在の医療に通じるものがあり、大きな注目に値しよう。

また耕牛が住んだ万才町の屋敷の 2 階には、オランダ風の部屋があり、長崎を訪ねた



図6. 吉雄耕牛肖像 (長崎歴史文化博物館蔵)

人々の驚嘆の的であった。当時の記録によると、「阿蘭陀大通事役吉雄幸左衛門家は、亦、阿蘭陀を学びて一座敷を別に敷瓦にし、其二階は板敷にして青漆塗の梯子欄干等を設たり。余も吉雄家に尋しに、さながら阿蘭陀館に入りたるごとく有し」（橘南谿『北窓瑣談』）という家に、「亭上阿蘭陀琴、望遠鏡、顕微鏡、天球、地球、ヨクタント、タルモメートル、其他奇物種々」（三浦梅園『帰山録』）が備えられていたという（勝盛 2009 年）。また耕牛は早くから



図 7. 耕牛の印記「Josiwo」
（松浦史料博物館蔵、
ウオイト『医学宝函』）

蘭書を収集しており、その蔵書に「Josiwo」というアルファベットの印記を捺していた（図 7）。この印を捺した蘭書は、現在松浦史料博物館、京都大学附属図書館など、日本各地に確認することができ、彼の蔵書の豊富さ、幅広さを物語っている。耕牛の墓碑は、長崎市禅林寺の吉雄家墓地に現存している。

本木良永（1735-1794）は、耕牛とほぼ同時代を生きた阿蘭陀通詞で、通称栄之進、のち仁太夫。字は士清、また蘭卓と号した。長崎市大光寺の本木家墓所に現存する良永の墓誌銘（榎林栄哲撰）によると、かつて命を奉じて蘭書の翻訳に取り組んだ際、厳冬に自ら冷水を裸体に浴び、素足で諏訪神社に詣で、その業の成就を祈ったという。ある人が諫めて「貴方は既に老いているのに、どうして自らそれほど苦しむのか」と言うと、「当家は代々翻訳で公禄を得てきた。その職を尽くして死に至らば、即ち吾が分のみ」と答え、また病に倒れてもなお蘭書を左右に置いて手には巻を捨てず、そのためますます精神を労したが、いささかも自愛することなく、結局立ち上がることはなかった、とのことである。いずれも良永の人となりを伝える興味深いエピソードである。

良永の業績はコペルニクス説（太陽中心説）の日本への初めての紹介を中心に多岐にわたるが、かつて本木家に伝えられた良永の訳述書の控えや草稿の類が、現在まとまった形で長崎歴史文化博物館に収蔵されている（図 8）。近年の研究では、吉雄耕牛との共訳書である『阿蘭陀元統暦和解』に、西洋のキリスト教的宇宙論で神や聖人たちの居所とされたエンピレウム天に関する記述があることや、また松浦静山らの依頼によって訳出された『日月圭和解』が、天明期以降の長崎において、キリタン系宇宙論書の『二儀略説』とともに利用されていたことが指摘されるなど（平岡 2008 年、2007 年）、良永の訳述活動のこれまで知られなかった側面・影響がわかってきている。本木家伝来の資料群が近世日欧学術交流にまつわる第一級資料であることは疑いなく、今後、他に現存する写本・文書類や、原本となった蘭書の版レベルでの同定などと合わせて、より一層の研究が進むことが期待される。

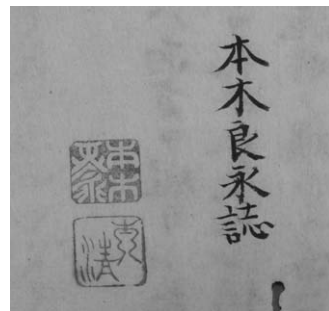


図 8. 良永の印記「本木良永」および「士清」
（長崎歴史文化博物館蔵『平天儀用法』）

最後に、志筑忠雄（1760-1806）の訳業についても若干触れておきたい。本展では、志筑の自筆稿本と伝えられる写本『万国管闡』（長崎歴史文化博物館蔵）を展示しているが、それと同時に、同書を著すにあたって志筑が実際に使用

した手沢本と同定されている蘭書の中から、『傑作精選東西インド海陸紀行集』（1706-1707 年）とパレ『外科全書』（1627 年）の 2 点も合わせて展示している（いずれも松浦史料博物館蔵。同定については松田 1998 年）。ニュートン自然哲学からオランダ語文法に至るまで、蘭学者として画期的な業績を残した志筑であるが、その生涯は未知の部分が多く、肖像画の類もまったく残されていない。今回一堂に展示される、彼の用いたであろう蘭書とその自筆稿本なる写本を前にして、これらを机上に鋭意翻訳に取り組む若き志筑の姿を想像してみるのも一興であろう。

シーボルトと慶賀

19 世紀初頭のオランダをとりまく国際情勢は、まさしく激動と呼ぶべきものであった。フランス革命とそれに続くナポレオン戦争によって、一時的にフランスに併合されたオランダは、その後のウィーン会議を経て、新生ネーデルラント王国として国家の再建にとりかかろうとしていた。その再建策の一つに日蘭貿易の再検討も含まれており、日本を科学的・総合的に研究して、その成果を貿易に反映させようとしていた。博物学に強い情熱を持つドイツ人医師のシーボルトは、こうした状況の中 1822 年にオランダに就職してオランダ領東インド陸軍の外科少佐となり、そして文政 6 年（1823）、バタヴィア総督から日本研究の命を受けて日本に派遣されたのであった（沓澤 2009 年）。

第 1 回来日時のシーボルトが、鳴滝塾で日本人の診療にあたり、また門人に医学伝習を行ってよいなどの例外的な特権を与えられたことは、上のような政治的背景抜きに考えることができない。出島商館長のステュルレルは文政 7 年（1824）長崎奉行に対してシーボルトにまつわる要望書を提出したが、その内容はシーボルトの医者としての能力を称揚しつつ、そうした人物を派遣したのは日本に医学をはじめ西洋の新知識を教授するためであり、実地診療を行わせるため市内への特別な立ち入り許可を希望する、というものだった。この希望は奉行に受け入れられ、シーボルトはその特権をうまく利用して数多くの資料を収集しつつ、また門人達にさまざまな課題を与えてそれを蘭語論文にして提出させるなど、日本研究に精力的に取り組んだのである。

同様に、川原慶賀が出島出入絵師として残した作品の多くも、オランダ国家による海外情報の収集という枠組みの中で生み出されたものであったということは、強調されてよいだろう。慶賀作品をまとめた形で含む最古のコレクションを作ったヤン・コック・ブロンホフ Jan Cock Blomhoff（1779-1853）は、ハーグの王立骨董陳列室への売却を念頭に、室長のファン・デ・カステーレ R.P. van de Kastele と密に連絡を取り合いつつ、日本での収集活動を進めていた（Effert 2008）。また、シーボルトが慶賀に支払った画料や、彼の用いた顔料、水彩画を描くための洋紙などを支給したのもオランダ政府であった（Van Oijen 2007）。慶賀筆とされる作品が、慶賀およびその弟子たちの共同制作である可能性はすでに繰り返し指摘されているが、そのような「工房」が成立するほどの特需は、新生オランダにおける海外情報収集の機運の高まりや、また資金面での豊富な援助の上にはじめ



て成立したものであったのである。

最後に、今回展示される慶賀作品の中でもとりわけ注目すべきが、近年オランダで発見され、今回が修復後初公開となる「人の一生」シリーズ計12点である(図9)。同シリーズについては、ライデン国立民族学博物館などに収蔵されるブロンホフ、フィッセル、シーボルトの各コレクションのものが知られているが、国内には現存例がなく、今回その1つが長崎に里帰りしたことをまずは喜びたい。古美術商の話によると、旧蔵者はこれらの絵を貼り合わせた屏風装の状態で実際に使用していたため、発見時においてすでに痛みが激しかったらしい。ともあれこのシリーズには、現存する他のシリーズにない特徴もすでに複数指摘されており、今後の詳細な研究を期待したい。



図9. 人の一生：祝言（長崎歴史文化博物館蔵）

おわりに

以上17世紀から19世紀までの日蘭知識交流史の点描を試みてきた。取り上げられなかった人物や資料はあまりにも多いが、本展で展示されるさまざまな資料を通じて、「鎖国」と呼ばれる時代に両国間でおこなわれた交流がいかに幅広く、また濃密なものであったかを感じ取っていただければ幸いです。

最後になったが、本展の開催にあたっては、本当に多くの方のご協力を賜った。とりわけ Paul Belien、Jan de Hond、Menno Fitski、Alexandra Gaba-van Dongen、Margaret Breukink-Peeze、Erwin Walstra らオランダの友人たちの格別の協力なくして、本展は実現することができなかつたらう。ここに記して深く感謝申し上げたい。

参考文献

W. ミヒェル、『阿蘭陀と NIPPON』展示キャプション解説原稿(2009年7月12日および8月31日付提供)、2009年。

Wolfgang Michel and Elke Werger-Klein, "Drop by drop: The Introduction of Western Distillation Techniques into Seventeenth-century Japan", *Journal of the Japan Society of Medical History*, vol. 50, No. 3, 2004, pp. 463-492.

Wolfgang Michel, "On the Background of Engelbert Kaempfer's Studies of Japanese Herbs and Drugs", *Journal of the Japan Society of Medical History*, vol. 48, No. 4, 2002, pp. 692-720.

高橋文「ツェンベリー」、W. ミヒェル・鳥井裕美子・川島真人編『九州の蘭学』思文閣出版、2009年。

勝盛典子「吉雄耕牛」、前掲『九州の蘭学』所収、2009年。

平岡隆二「イエズス会の日本布教戦略と宇宙論：好奇と理性、デウスの存在証明、パライソの場所」、『長崎歴史文化博物館研究紀要』第3号、2008年。

平岡隆二「写本『天文方書留』に見る南蛮・蘭学系天文学の混在」、『科学史研究』第46巻、2007年。

松田清『洋学の書誌的研究』臨川書店、1998年。

杵沢宣賢「シーボルト」、前掲『九州の蘭学』所収、2009年。

M.J.P. van Oijen, "A Short History of the Siebold Collection of Japanese Fishes in the National Museum of Natural History, Leiden, The Netherlands" (邦訳：M.J.P. ファン・オイエン「オランダのライデン国立自然史博物館に収蔵されるシーボルトの日本産魚類コレクション小史」)、長崎歴史文化博物館編『シーボルトの水族館』長崎歴史文化博物館、2007年。

Rudolf Effert, *Royal Cabinets and Auxiliary Branches: Origins of the National Museum of Ethnology 1816-1883* (Leiden: CNWS Publications, 2008).



000



000